

事業報告書

自 平成 30 年 4 月 1 日
至 平成 31 年 3 月 31 日

I 事業活動に関する事項

[主催事業]

1) KAWASAKI しんゆり映画祭

■ 2018 年度 ボランティアスタッフ説明会

期 日： 2018 年 5 月 19 日(土)10 時
会 場： しんゆり交流空間リリオス
期 日： 2018 年 5 月 19 日(土)14 時 / 5 月 27 日(日)10 時 30 分
会 場： 川崎市アートセンター 3F コラボレーションスペース
期 日： 2018 年 5 月 27 日(日)14 時 30 分
会 場： 麻生市民館第 3 会議室

新規ボランティアスタッフ募集を上記日程で実施。今年はスタッフの提案で、麻生市民館としんゆり交流空間リリオス、川崎市アートセンターにて説明会を実施した。ボランティアスタッフ募集の告知方法は例年どおり、市内公共施設へのチラシ配布、市政だより、映画祭ホームページ等で行った。

前年同様に 1 年間を通して参加できるスタッフを募集し、結果 27 名の方が新たにスタッフとして登録し 59 名での活動となった。映画祭スタッフの活動期間は、4 月～翌年 3 月。

ボランティアスタッフの活動セクションは、プログラム(経験 2 年以上)、バリアフリー、ジュニア映画制作ワークショップ、野外上映会、美術、ホームページ、チラシ作成、プレス、SNS 記録、協賛・寄付、カフェ屋台、運営サポートスタッフ、運営委員会、にそれぞれが属して活動を行った。

■ 2018 年度 ボランティア全体会

期日： 2018 年 3 月～2019 年 1 月
内容： 映画祭事業の連絡、各セクションの活動報告・打合せ、ボランティア交流
会場： 川崎市アートセンター ほか

ボランティア全体が集まる全体会を 1～2 か月に 1 回程度実施した。映画祭運営委員会や単年度実行会議で決定された情報の共有や軽作業(ダイレクトメール発送準備など)も行われた。

2018 年度の開催日は 3/31、4/15、5/19、6/9、8/18、9/2、12/15、1/27 となった。

■ 2018 年度 ボランティアスタッフ研修

期日： 2018 年 9 月 24 日(月・祝)、10 月 14 日(日)
内容： ボランティア研修 ～施設利用ガイダンス
会場： 川崎市アートセンター(小劇場・映像館)

川崎市アートセンターをメイン会場として映画祭を実施していることから、アートセンター職員の協力を得て施設の特徴や利用方法について、研修を実施した。2つの会場で使用内容や注意点が異なることもあり、各会場を実際に見ながら使用方法、避難経路の確認、設備の特徴の確認を行った。上映素材の種類、接客のポイントなど多岐にわたり、新規のスタッフはもちろん長年映画祭のスタッフを務めてきたメンバーも改めて再確認を行う場となり、本番前に欠かせないものとなっている。

■第19回ジュニア映画制作ワークショップ 協賛：小田急電鉄株式会社

参加希望者向け説明会

期日：2018年4月22日（日） / 5月6日（日）

会場：中原市民館 / 川崎市アートセンター

映画制作ワークショップ

期間：2018年6月10日（日）～8月21日（火） 完成作品発表会：11月4日（日）

場所：日本映画大学、川崎市アートセンター、岡上分館、百合丘勸交會館

参加者数：21名（チーム名 悪の軍団マウッサ）

川崎市とその周辺に在住・在学している中学生を対象とした映画制作ワークショップを開催。総合指導に日本映画学校出身で長年ワークショップに関わって頂いている川久保直貴氏、技術指導に田崎絵美氏（撮影）、若林大介氏（整音）を迎え、技術サポートとして日本映画学校・日本映画大学卒業生を中心に6名が参加して指導が行われた。

5月中旬より川崎市教育委員会の協力により、市内公立中学校生徒に参加説明会チラシを配布。ワークショップ期間中の出席率の向上や、希望者との意思疎通を図るために、参加希望者は説明会への参加を必須としている。アートセンターの他、川崎市中部の説明会として中原市民館で実施した。

6月10日（日）に参加生徒とスタッフの顔合わせとオリエンテーションを行った。同日、川久保講師による脚本指導が始まり、参加生徒が事前に提出したアイデアを発表し、制作が開始された。

7月1日（日）には映画技術講座を実施。技術指導の田崎絵美氏より、日本映画大学にお借りした実際撮影に使用するカメラ等機材の使用方法や映画撮影の方法の講義を受ける。

その後、ロケハンや小道具作成などの撮影準備を経て、7月23日より撮影開始。撮影場所は新百合ヶ丘近隣を使用し、8月2日までの期間に行った。

8月3日より編集作業に入り、希望者全員が編集作業を体験。日本映画大学のスタジオを利用してアフレコ・MA作業を行い、『インサイド・ヒーロー』（32分）を完成させ8月21日に試写を行った。

作品完成後は川崎市アートセンターのスタッフの指導・アドバイスにより、11月の作品発表会へ向けて広報物作成（チラシデザイン作業等）を実施し、イベントでのチラシ配りにも参加した。

そして、11月4日（日）にKAWASAKI しんゆり映画祭（会場：川崎市アートセンター・アルテリオ小劇場 195席）にて一般の観客を入れて上映し、参加生徒による舞台挨拶が行われた。



■ワークショップ参加生徒



■撮影準備風景



■屋内撮影風景



■ロケ撮影風景



■編集作業風景



■広報物のデザイン風景

■第19回 なつやすみ野外上映会 共同主催：麻生区

期日：2018年8月25日（土） / 場所：川崎市立麻生小学校 校庭 / 参加者数：955名（延べ来場者数）

19回目を迎えた本年度の野外上映会は、昨年度の「はるひ野小中学校」から「麻生小学校」に開催場所を戻しての実施となった。上映作品は一昨年の同会場で開催した際の『パディントン』の続編にあたる『パディントン2』（2017年／イギリス・フランス／104分）を日本語吹き替え版で上映した。

広報活動は、川崎市や麻生区の広報誌への掲載の他、タウン誌への掲載、小学校へのチラシ配布等を7月より展開。地元町内会へのチラシの回覧、こども文化センターなどへのチラシ設置も行われた。

2年連続で体育館での開催が続いていたが、今年は台風一過の快晴となり、校庭での実施となった。準備時間中の吹き戻しの強風と、上映時間中の夕立に対しての注意が払われたが、天候は崩れることなく終わることができた。屋台コーナーは5店舗で実施。スタッフ実施の屋台では社会福祉団体のはっぴわーく、夢花工房オリブが製造している商品（上映作品に因んだマーマレードとジャムべら）の販売も行った。ゲームコーナーでは上映作品をモチーフにした水鉄砲（射的）と、会場内にいるキャラクターを見つける宝さがしゲームが行われた。

18時30分に映画祭代表の中山による挨拶、多田区長のご挨拶、来賓紹介に続き、昭和音楽大学生によるサクソ四重奏と、前作「パディントン」の紹介イベントを行い、19時より上映が開始された。

今年度の看護師派遣は、株式会社ナチュラルハートコーディネイトへ依頼をした。会場内で転んでの軽傷の処置を行ったほか、観客で体調を崩された方はいなかった。



■会場入り口風景



■開場風景



■開場中の客席の様子



■ゲーム（宝さがし）の様子



■スタッフ屋台の様子



■福祉団体製造品の販売



■昭和音楽大生による演奏



■あらすじ紹介イベントの様子



■上映直前の様子

■第 24 回 KAWASAKI しんゆり映画祭 2018

□ 本祭実施概要

- 主 催 NPO 法人 KAWASAKI アーツ
- 企画・運営 NPO 法人 KAWASAKI アーツ・KAWASAKI しんゆり映画祭
- 理 事 長 藤田朝也
- 映画祭代表 中山周治
- 共 催 川崎市、川崎市アートセンター、川崎市教育委員会、日本映画大学、
(一財)川崎新都心街づくり財団、昭和音楽大学
- 後 援 「映像のまち・かわさき」推進フォーラム、麻生区文化協会、
(公財)川崎市生涯学習財団、NPO 法人しんゆり・芸術のまちづくり、
東京新聞、朝日新聞川崎支局、毎日新聞川崎支局、読売新聞川崎支局、
マイタウン、(株)タウンニュース社、FMヨコハマ、
かわさき FM (79.1MHz)、(株)メディスタくらしの窓新聞社、
(株)ジェイコムイースト 町田・川崎局

- 協力・協賛 小田急電鉄(株)、新百合ヶ丘エリアマネジメントコンソーシアム、
(株)エーイーティー、(有)柿生恒産、川崎信用金庫、
(株)川崎フロンターレ、新百合ヶ丘農住都市開発(株)、
ホテルモリノ新百合ヶ丘、麻生区商店街連合会、(株)カジノヤ、
川崎商工会議所、河津造園土木(株)、三井不動産リアルティ(株)、
小田急新百合ヶ丘エルミロード、新百合ヶ丘商店会、
セレサ川崎農業協同組合、三井住友銀行(株)、三井ホーム(株)、
川崎医療生活協同組合あさお診療所、アジア料理 JASMINE、寡黙堂、
カンガルー、(株)シノワーズ、Ti-da Bar、パティスリーエチエンヌ、
チャンキー・チャンキー、(株)北島工務店、
イオンシネマ新百合ヶ丘、イオンスタイル新百合ヶ丘

- 期 間 10月28日(日)～11月4日(日) [10月29日(月)休映]
- 会 場 川崎市アートセンター・映像館(113席)、小劇場(195席)
- 上映作品数 20作品
- 登 壇 16名+2団体
- 総入場者数 2530人
- ボランティア 59名

2018年度のKAWASAKI しんゆり映画祭は川崎市アートセンター・アルテリオ映像館、小劇場の2会場
で上映を行い、有料19作品・無料1作品で、全20作品39回の上映を行った。

リリー・フランキー氏をはじめ、多くのゲストにお越しいただくことができ、映画と観客と制作者と
映画祭がつながる機会を提供することができた。アジア映画特集内の「バーバリ 王の凱旋」では、
昨年ニュース番組でも取り上げられるなど、話題を呼んだ“絶叫上映”という、観客が一体となり映画
を楽しむイベントを初めて行ったほか、数年ぶりとなる「親子映画鑑賞会」も実施し、幅広い年齢層に
楽しんでいただけるプログラムが組まれた。この年にカンヌ国際映画祭パルムドール受賞された是枝監
督の過去作「誰も知らない」を映画評論家・佐藤忠男氏による解説付きで上映するなど時流に合わせた
プログラムも組まれた。

バリアフリー上映では、『モリのいる場所』に対して副音声ガイドを作成し上映を行ったほか、バリ
アフリー字幕付き上映、保育付き上映を実施した。

川崎市文化財団との共同主催での「映画音楽のタベ」や、ハロウィンパレードや北口マルシェなど、
他イベントと連携し地域の盛り上げに貢献することができた。

■4月～8月 プログラム選定

2016年から実施している、ボランティアスタッフ内から上映作品案を募り、投票して上位作品を上映するという方法を取り入れた3年目となった。昨年度の反省点を活かして、作品の募り方や投票方法の改善が行われた結果、昨年とはまた違ったスタッフからの応募もあり、徐々に浸透が見受けられた。プログラム委員で、継続枠の上映作品選定や全体調整等を4月～8月まで定期的に会議を実施し確定させた。

■ 8月～10月 広報宣伝物、WEB ページ等の作成

プログラム決定を受け、チラシの制作やホームページ・Facebook・twitterの更新等が行われた。昨年のA4四つ折りリーフレット(8ページ)から1枚増やしたA4リーフレット12ページに変更をし、来場ゲスト情報も加えた上映作品情報に加えて、街の情報なども入れた充実の内容となった。各個別企画のチラシも市民スタッフの手で作成された。



■ 9月～11月 広報活動

映画祭がスタートした1995年から実施している駅前でのポスター展を今年も実施した。また、川崎市の協力による川崎駅アゼリアビジョンでの予告編の放映、麻生区の協力による駅前のバスターミナルの柱巻広告も実施した。小田急電鉄の協力による駅構内への映画祭ポスターの掲示、小田急バス協力のバス内の吊り下げチラシの設置、麻生区役所でのポスター展など実績のある広報を中心に展開された。映画館へのチラシ設置も継続して積極的に行われた。川崎市アートセンターでの入場時間を利用しての予告編上映など、広報の幅を広げる取り組みも並行して行われた。また、2016年から協力関係にある川崎大師ゆめシネマでの広報活動は、イベント当日の悪天候のため、中止となった。



■ 駅頭チラシ配布



■ 区民まつりでの広報風景



■ アートセンター内PRボード



■ 駅前ポスター展



■ 麻生区協力による柱巻広告



■ 麻生図書館協力の関連図書棚

■ KAWASAKI しんゆり映画祭（本祭）

期日：2018年10月28日（日）～11月4日（日） ※10月29日（月）休映日 全7日間

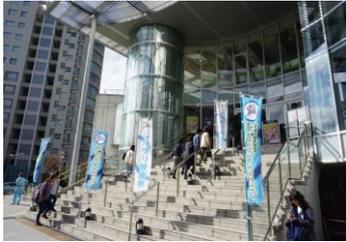
場所：川崎市アートセンター アルテリオ映像館・アルテリオ小劇場

川崎市アートセンターの映像館、小劇場にて国内外の秀作の上映を行った。

2018年は“家族”や“愛”をテーマにした作品が多く並んだため、「家族を称えよ！愛を称えよ！映画を称えよ！」というリーフレットキャッチコピーがつけられた。

今年度に特に勢いのあったアジア映画に注目して特集が生まれ、邦画の秀作、日本映画大学関連の作品、カンヌ映画祭パルムドール獲得で沸いた是枝監督の過去作品、ニュースでも取り上げられた絶叫上映や、親子映画鑑賞会などのイベント付き上映など、幅広い年代が同じ会場に集う市民映画祭らしいラインナップとなった。2016年から実施しているスタッフ全員参加の公募・投票も行い、今年度も多くのスタッフが作品選定に関わる機会を提供することができた。

土日を中心に上映作品にちなんだゲストを招き、それぞれ担当の市民プロデューサーが企画したトークイベントが行われた。「パーフェクト・レボリューション」のリリー・フランキーさん、「素敵なダイナマイトスキャンダル」の富永監督は、ご本人の誕生日にご登壇いただく事になり、壇上にてお祝いをさせていただくことができた。チケット販売などの運営についても市民スタッフを中心に行われた。



■ しんゆり映画祭会場前風景



■ 劇場内 上映前の様子



■ 「パーフェクト・レボリューション」トーク



■ 「海を駆ける」阿部純子さん



■ 「四月の永い夢」朝倉あきさん



■ 「モリのいる場所」沖田監督



■ 富永昌敬監督サイン風景



■ 映画評論家：佐藤忠男さん



■ 映画ライター：よしひろまさみちさん



■ 「タクシー運転手」ハン・トンヒョン准教授



■ 「ラストラブライター」トーク風景



■ 「恋とボルバキア」小野監督

【特別企画】

□ 11月3日（土・祝） 絶叫上映 「バーフバリ 王の凱旋 ～完全版～」

2018年度に話題になった、観客と一緒に映画を見ながら声を出して応援をする上映イベント・絶叫上映を、『バーフバリ 王の凱旋 ～完全版～』にて行った。絶叫上映のイベントーとして、「V8JAPAN」の3名をお呼びして、絶叫上映に関してのレクチャー、鳴り物（タンバリン）の使用法や声出しの注意事項などを行った。イベント当日に別劇場「キネカ大森」で、前作にあたる『バーフバリ 伝説誕生～完全版～』の絶叫上映が行われていたことをうけ、キネカ大森に連動を呼びかけ、1日に2会場をはしごして2作品連続で鑑賞できるよう上映時間を調整していただき、大森から映画祭にお越しの観客の誘導を映画登場人物の衣装をした映画祭スタッフが行うなど、映画祭の枠を超えた企画となった。



■上映前イベントの様子



■観客の様子



■キネカ大森からの観客誘導

□ 11月4日 しんゆり映画祭の親子映画鑑賞会 「KUBO/クボ 二本の弦の秘密」

しんゆり映画祭では2011年以來となる親子向けのプログラムが組まれた。野外上映会での観客に劇場での映画体験を楽しんでいただくことを目的に実施された。上映作品としては『KUBO/クボ 二本の弦の秘密』の上映と合わせて、作品に関連したイベントを行った。上映前には、川崎市内で活動をされている「魂刀流志伎会」をお呼びしてイベントを行い、児童をステージにあげての立ち廻り剣術体験も行った。上映後には、折り紙教室と甲冑の着付け体験も行い、親子で楽しめるプログラムとなった。



■上映前イベント立ち廻り剣術体験



■上映後イベント 折り紙教室



■上映後イベント 甲冑着付け

□ 11月4日 ジュニア映画制作ワークショップ発表会 （会場：アルテリオ小劇場）

今年度も「ジュニア映画制作ワークショップ」の完成作品発表会をアルテリオ小劇場にて実施。制作に関わった中学生や家族のほか、一般の観客も鑑賞に訪れた。完成作品『インサイド・ヒーロー』（32分）とメイキング映像の上映後、参加した中学生の舞台挨拶、指導講師による講評を行い、今年のワークショップの様子を振り返った。



■ジュニア映画制作ワークショップ 舞台挨拶の様子

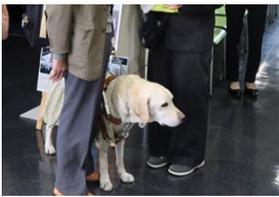


■上映前会場内風景



■入場整理券配布風景

□ バリアフリーシアターの実施（10月28日、31日、11月2日、4日）



■副音声ガイド上映前



■副音声ガイド上映後

●副音声ガイド付上映

10月28日（日）小劇場、11月2日（金）映像館の『モリのいる場所』上映に関して、視覚障がい者向けの副音声ガイドを映画祭独自に制作し・提供を行った。映画の舞台となった主人公の自宅をジオラマで再現し、ガイド利用者にも触って楽しんでいただくなどの工夫もされた。10月28日の上映回ではゲストに沖田修一監督をお呼びし、2回ともに満席となった。（サービス利用者数・16名）

●日本語字幕付上映

10月31日（水）、11月4日（日）の『海を駆ける』に関して、聴覚障がい者用日本語字幕付き素材の提供を受けて上映を行った。監督からのメッセージを印刷物で配るなどの工夫もされた。

●保育付上映

10月31日（水）上映の『タクシー運転手～約束は海を越えて～』『blank13』に関して、6ヵ月～4歳までのこどもを預かる託児サービスを実施。保育グループ「ジャンケンポン」と提携して実施し、保育者を2名派遣してもらい、保護者の映画鑑賞時間中、こどもを預かった。

□ 11月3日（土）～11月4日（日） シネマウマカフェ （会場：3F コラボ）



昨年度に引き続き、上映会場であるアートセンター3F コラボレーションスペースにおいて、近隣の飲食店と提携した「シネマウマカフェ」を開設した。日替わりでお弁当、コーヒーなどの提供を行い、来場者に地元のお店を紹介し、その味を楽しんでもらうことができた。

シネマウマカフェ参加店舗 「ムビリンゴ（読売ランド前）」、「NARUTO Coffee&Roasters（狛江）」

□ 映画祭との連動イベント



■イベントチラシ



■ハロウィンパレードの様子



■映画祭スタッフ手作り記念写真ブース

「映画音楽の夕べ」（10/26）が新百合 21 ホールと映画祭のコラボレーションとして行われた。映画音楽の名曲を中心に生演奏が行われ、映画監督で映画大学教授でもある緒方明氏を招いてのトークも行われ、映画祭開催へと盛り上げるイベントとなった。

「しんゆり北口マルシェ」、「ハロウィンパレード」（10/28）が、しんゆりマルシェ 2018 実行委員会により川崎市アートセンター前にて実施された。

第 24 回 KAWASAKI しんゆり映画祭 2018 上映作品

◇リーフレットキャッチコピー 「家族を称えよ！愛を称えよ！映画を称えよ！」

【見逃せない！アジア映画特集】

「タクシー運転手 ～約束は海を越えて～」 「バーフバリ 王の凱旋 完全版」
「海を駆ける（日本語字幕付）」 「ラッカは静かに虐殺されている」 「軍中楽園」

【ジェームズ・アイヴォリーの世界】

「君の名前で僕を呼んで」 「モーリス 4K」

【「あの人」を演じるということ。】

「素敵なダイナマイトスキャンダル」 「モリのいる場所」

【多くの顔を持つ役者「リリー・フランキー」】

「blank13」 「パーフェクト・レボリューション」

【注目！今アツイ監督たち】

「見栄を張る」 「四月の永い夢」 「ラストラブレター」
「おじいちゃん、死んじゃったって。」 「恋とボルバキア」

【2018 年”今だからこそ”ぜひ観たい名作】

「誰も知らない」 「アデル、ブルーは熱い色」

【しんゆり映画祭の親子映画鑑賞会】

「KUBO／クボ 二本の弦の秘密（吹替版）」

【しんゆりバリアフリーシアター】

「海を駆ける」（バリアフリー日本語字幕付）、 「モリのいる場所」（副音声イヤホンガイド付）
「タクシー運転手 ～約束は海を越えて～」 「blank13」（保育サービス付き）

【ジュニア映画制作ワークショップ】

「インサイド・ヒーロー」

合計 20 作品（※中・短編含む）

登壇者（敬称略、順不同）

リリー・フランキー（俳優）、松本准平（監督）、熊篠慶彦（原作者）、沖田修一（監督）、
富永昌敬（監督）、阿部純子（俳優）、朝倉あき（俳優）、藤村明世（監督）、久保陽香（俳優）
小野さやか（監督）、森田博之（監督）、ミネオショウ（俳優）、影山祐子（俳優）
佐藤忠男（映画評論家）、ハン・トンヒョン（日本映画大学准教授）、よしひろまさみち（映画ライター）

V8JAPAN（絶叫上映）、魂刀流志伎会（立ち廻り剣術）

合計 16 名 + 2 団体

動員数データ

チケット売上枚数 2221 枚

観客動員数 2530 名

有料プログラム数 19 プログラム（19 作品）

上映プログラム数 20 プログラム（20 作品）

合計上映回数 39 回

1 日あたりの平均集客数 全日 361 名 / 休日 486 名 / 平日 268 名

1 作品あたりの平均集客数 126 名

今年度の映画祭に関する総括と来年度への取組み

2018年度は上映作品20作品となり、有料上映19プログラム（19作品）、無料上映1プログラム（1作品）となった。川崎市アートセンター映像館・小劇場を会場に、10/28（日）～11/4（日）で開催し、期間中の10/29（月）は休映日とした。

単体上映回では11/3の「バーフバリ 王の凱旋 ～完全版～」のイベント付き上映回（絶叫上映）が1番の入場者数を記録した。要因としては、2017年末から2018年初めにかけて話題になった作品の完全版の上映であったこと、テレビニュースでも話題になった観客参加型の上映「絶叫上映」を行ったことが要因として考えられ、普段のしんゆり映画祭の観客以外を呼び込むことに成功したことが大きかったと思われる。「親子映画鑑賞会」など、幅広い世代に劇場に足を運んでいただく施策も行われた。

バリアフリーシアターでは継続して行われている独自作成した副音声ガイドをつけての上映と、保育サービス、聴覚障がい者向け日本語字幕付き上映が行われた。今年は「モリのいる場所」に副音声ガイドを制作した。映画に出演されていた樹木希林さんが9月に亡くなられたこともあり、一般の観客も多く劇場にお越しいただくことになり、小劇場ではバリアフリーサービス利用者の動線の確保なども注意して行われた。映画の主人公の自宅をジオラマで作成し触って楽しんでいただくなど、映画に加えて楽しんでいただく施策も行われた。聴覚障がい者向け日本語字幕付き上映では、「海を駆ける」を上映し、監督からのメッセージを印刷物で配るなどの工夫もされた。

広報については、例年行っている川崎市と麻生区を通しての媒体の他、麻生区協力による柱巻き広告や小田急電鉄の協力による駅構内のポスター設置、麻生図書館での企画棚の作成、小田急バスの協力によるバス内吊り下げチラシの設置も継続して行われた。また、10月前半の映画祭期間外に川崎市アートセンターの入場時間を利用した映画祭上映作品の予告編を流していただくなど広報の幅を広げる取り組みも並行して行われた。

今年度は継続して行われている地域団体とのつながりのほか、上映作品を通して他団体とのつながりを持つことが多くできた年となった。新百合21ホールとのコラボレーション企画として行われた『映画音楽のタベ』は、日本映画大学教授の緒方明監督を招いた新百合ヶ丘らしいイベントになった。しんゆりマルシェ2018実行委員会による「しんゆり北口マルシェ」、「ハロウィンパレード」は、映画祭開催初日（10/28）の会場前にて実施され、大いに賑わった。今後も、このつながりを活かして継続させていきたい。

2016年度から導入された参加費（2000円）制度は、スタッフ内部で定着してきたが、当日の運営スタッフ人数の確保に苦勞する場面もあり、スタッフ募集方法、当日スタッフへの呼びかけや他団体の協力依頼など対応策を検討していきたい。

プログラムのスタッフ公募制に関しては、投票方法や投票結果の採択方法、当選後のワークフローなど昨年度にあがった問題点の改善を行ったが、実施にあたってまだ不備があり、さらなる改善を図りたい。特に候補作品をより多くのスタッフがあげやすくなる環境を整えていく施策を行っていきたい。

今年度のジュニア映画制作ワークショップは、日本映画大学の協力と映画大学に関わるスタッフに支えられ、酷暑のなか無事に事業を終えることができたが、中学生の環境の変化がより感じられる年となった。来年度以降はより中学生が参加しやすい方法や、参加者がより主体となる環境づくりを行っていきたい。

2019年度は25回目の節目となり、今まで培ってきた市民映画祭として基盤を強化しつつ、街を盛り上げる映画祭としての役割も強化していきたい。次の25年に向けて持続可能な組織づくりの検討も継続して行っていきたい。

以上

2) company ma 劇団「間」第4回公演『カバンの中の記憶』

開催期間 : 2018年9月15日(土)~17日(月・祝) 5回公演

会場 : 川崎市アートセンター アルテリオ小劇場



構成・演出 大谷賢治郎

音楽 青柳拓次 題字 平野甲賀 照明 鷲崎淳一郎 (ライティングユニオン)

美術 大谷賢治郎 衣装 大谷恵理子 音響 坂口野花 舞台監督 野口岳大

チラシデザイン 奥秋圭 制作 田事務所・安達原泉

提携 川崎市アートセンター 後援 NPO 法人 しんゆり・芸術のまちづくり

劇団わが町公演でワークショップ講師・演出補を担当し、アーツ理事でもある大谷賢治郎主宰の劇団「間」company ma。「子どもが笑えば、世界は笑う」を合言葉に、新百合ヶ丘を拠点に活動を続け、今回川崎市アートセンターで第5回本公演を行った。

今回は、主宰の大谷賢治郎が構成・演出を担当した。

「米軍従軍写真家、ジョー・オドネル氏が撮った、原爆が投下された長崎で、死んだ赤ん坊を背負う少年の写真」をモチーフに、身体表現を中心にストーリー展開していく作品だが、映像や照明を兼ねた小道具、音楽を大きく演出に取り込み、限られた台詞や歌で不条理な世界を表現。戦争や平和を、直接的でなく、現代を生きる演者でもある20~30代の若者の視線・日常から、様々な記憶に紐づけた多様な身体表現により、力強く優しく描いた。

今回の客演者には、身体能力の高いパフォーマーも多く、全体的にアクロバットな動きも多様され舞台にダイナミズムを生み、複数の身体の組み合わせで不思議な世界観を有機的に生み出す、舞台表現の新たな可能性を探るチャレンジングな作品となった。

公演来場者には親子客が多く見られ、こどものみならず大人にも大変好評であった。

総動員数は、5回公演で596人。

また、今作は昨年に続き、日本芸術文化振興基金より助成を請けることとなった。KAWASAKI アーツでは、公演の主催、制作業務・助成申請関連事務を担当した。

[企画・制作事業]

1. バリアフリーシアター制作事業

1997年より活動している「バリアフリーシアター制作」は22年目を迎えた。

(1) 視覚障がい者向けの活動

・音声ガイド制作と視覚障がい者の介助

視覚障がい者が映画館で映画を楽しむための音声ガイドは、29年度より1本増えて6本制作した（映画祭作品1本含む）。副音声ガイドと日本語吹替は、全て収録し、アートセンターでは、5本の作品に対して、3回/1作品、一年間で15回のバリアフリー上映を実施した。

バリアフリーシアター制作チームのスタッフは、視覚障がい者から希望者があれば新百合ヶ丘駅⇨アートセンターの送迎と劇場内に於ける介助を行っている。その際、利用者の声を聞き、ガイド作りにフィードバックしている。

■川崎市アートセンターからの委託およびしんゆり映画祭で音声ガイドを作った作品。

- ①『ロンドン、人生はじめます』 副音声音声ガイド台本/日本語吹替
- ②『大いなる幻影』 副音声ガイド台本/日本語吹替
- ③ しんゆり映画祭プログラム『モリのいる場所』 副音声ガイド台本
- ④『フジコ・ヘミングの時間』 副音声ガイド台本/日本語吹替
- ⑤『禁じられた遊び』 副音声ガイド台本/日本語吹替
- ⑥『ねことじいちゃん』 副音声ガイド台本

(2) 聴覚障害者に向けての活動

しんゆり映画祭にて、聴覚障がい者用日本語字幕付き素材の提供を受けて上映。
(詳細は映画祭報告 P. 11 を参照)

(3) 保育サービス付き上映

しんゆり映画祭にて、2作品の上映で保育サービスを実施。
(詳細は映画祭報告 P. 11 を参照)

(4) 高校生以上を対象にした映画副音声ガイド制作入門講座(ワークショップ)

開催期間 : 2018年12月8日(土)~2月2日(日) 全4回

会場 : 麻生市民館、川崎市アートセンター、新百合21ビル ほか

映画の副音声ガイド制作を体験できるワークショップを開催。短編映画の副音声台本制作からライブ朗読上映までを体験した。この事業は公益財団法人川崎市文化財団が行う「パラアート推進公募型事業委託」に採択され行われ、教材対象作品としてNDJC(文化庁委託事業「若手映画作家育成プロジェクト」)事務局から作品・脚本借用等の協力を得た。

【講座(全4回)概要】受講者数: 13名、参加料: 無料

第1回 副音声ガイド体験とガイダンス 2018年12月8日(土)

第2回 台本制作 2019年1月19日(土)

第3回 送迎と朗読体験 2019年1月26日(土)

第4回 副音声ガイド付き上映とまとめ 2019年2月2日(土)

このワークショップは、高校生以上を対象とした。10代~20代の若い世代に興味を持ってもらい、ボランティアに参加してほしいという狙いがあったので、川崎市内の高校や川崎市にある大学に向けて

募集チラシを配布した。一方で、しんゆり映画祭のリーフレットへの掲載、川崎市アートセンターや市内の公共館、ボランティアセンターへのチラシの設置を行い、映画、またはボランティア活動に興味を持った人にも募集を行った。参加者の年代の分布をみると、およそ6割が40代以上であり、応募動機から映画に興味がある人が半数、ボランティア活動に興味がある人が半数という結果を得た。

この結果から、10代～20代の募集方法の改善が必要であり、学校への個別呼びかけへ切り替えたり、開催方法（大学・高校内部への出張開催にするなど）の工夫したりすることが必要であると考えた。

活動を通じて、ワークショップ受講生の30代、40代、50代に熱意の高い人が多いと感じられた。バリアフリー上映活動の持続可能性を考えるには、必ずしも学生をターゲットとする必要はなく、年代に関わらず、多くの人に参加することが望ましいと考えた。

男女比を見ると圧倒的に男性が少ない。また、ボランティア参加を希望する人においても、仕事、子育て、他のボランティア活動などで忙しいという回答が多かったことから、活動の全てに参加できる人材を求めるのではなく、送迎支援、台本制作、副音声朗読、日本語吹替といった一部分のみ、短時間だけでも参加可能な人材を広く集めることを考えていくなど、募集形態の転換も必要であると感じた。

また、高校生等若い層への働きかけの方法として、ダイレクトに高校生に呼びかけるのとは別に、高校の教師（国語科やボランティア部顧問を始めとした）へ働きかけるアプローチも有効なのではないかと考える。教師向けの講座を設ける等して、副音声ガイド制作を体験してもらい、その教師が課外授業等で、生徒に教えていくというもの。

こうしたバリアフリーの活動は、人材育成がこれからの大きな課題であり、重要なカギとなる。人材育成に時間をかけないと、活動の底上げにつながっていかない。

現在、副音声ガイド制作を担っているのはボランティアスタッフであるが、将来的には職業として社会に定着していくのが、望ましいと思われる。

そうすれば、学生も将来自分が就く仕事と関連して、バリアフリーの世界と出会っていけるという面もある。

現在は、副音声ガイドを制作するのも、教えていくのもボランティアでやっているため、どうしても時間的、金銭的に制限が生まれてしまう面がある。

これがボランティアでなく職業となっていけば、作品単体のことだけでなく包括的に大きな絵を描いて、これからのバリアフリーの展開にさらにスピード感を持って働きかけていくことができると思われる。

そういう点で、社会の仕組みをバリアフリーの視点から考えていく際、行政が組織していく例が生まれてきてもよい時代に差し掛かっているととも考えられる。



■ 参加者募集チラシ



■ ガイド台本制作体験の様子



■ 視覚障がい者送迎体験の様子

(5) 音声ガイドの朗読や外国映画の日本語吹替で声優として声を出すスタッフを対象としたワークショップ「声の出し方教えます」

実施日：2018年7月1日（日）、場所：新百合21ホール、練習室 参加者：12名
 （講師謝礼の半額及び会場費はバリアフリーシアター制作チームの運営費から支出した）

視覚障がい者が外国映画の日本語吹替えを自然に楽しめるように、バリアフリーシアター制作チームのスタッフを対象としたワークショップ「声の出し方教えます」を1回実施した。

講師として、2000年代初めの頃から多くの外国映画に声優として参加して下さっている秋元紀子氏をお招きした。同氏は、俳優、朗読家として活動する一方、東京アナウンス学院、和洋女子大学他で講師を勤めるなど多方面でご活躍中である。

今回のワークショップの参加者は、活動歴の長い人から、18年春に参加した者まで市民ボランティアスタッフ12名。

外国語映画の台詞の日本語吹替えは、プロの声優に交じってボランティアスタッフも参加しており、今回はそのスキルアップするためのワークショップ。こういったスタッフの勉強会は、2014年5月に秋元さんを講師にお招きした『チョコレートドーナツ』吹替え発声講座以来4年ぶり、新しいスタッフにとっては初めてのことで、2時間余のワークショップだったが、「体全体で声を発すること」を学び、参加者にとっては新鮮な体験となった。

利用者の要望やスタッフの希望を聞きながらバリアフリーシアター制作チームの今後の制作活動の足りない面を補ったり、現在のバリアフリー上映の流れに即した情報を学ぶ場として、ワークショップや勉強会を今後も企画し開催していきたい。

(6) 新しいスタッフへの実地研修とバリアフリー上映のガイダンス

毎年、新規に参加する映画祭のボランティアスタッフでバリアフリーセクションの活動に興味を持ったスタッフへは、映画祭のバリアフリーシアターセクションチーフと新人スタッフ連絡係が中心となって送迎の実地研修・イヤホンガイド付映画の鑑賞体験・音声ガイド台本制作のガイダンスを行っている。アートセンターのバリアフリー上映の場をお借りすることで送迎や鑑賞の体験が実現している。映画祭のバリアフリー上映の活動は、KAWASAKI アーツのバリアフリーシアター制作事業に参加する一つの窓口になっている。

(7) スタッフブログとツイッターによる情報発信

平成24年6月 (<http://barrierfree-theater.sblo.jp/archives/201206-1.html>) からスタートしたブログ・バリアフリーシアター活動日誌は、今月で8年目に突入した。ブログでは、制作チーム・スタッフがガイド制作の様子やバリアフリー上映、制作スタッフの声や映画に関する話題を毎月2回程度発信している。最新ブログは、先月17日「次回の副音声ガイド上映は『家(うち)へ帰ろう』です」 (<http://barrierfree-theater.sblo.jp/archives/201906-1.html>)。活動の足跡を伝える貴重な記録となっている。

Twitterは、フォロワー数は昨年からの約100増え、170を越した。外国映画音声ガイド・日本語吹替えアフレコ風景、アートセンターのバリアフリー上映情報、活動日誌のブログ更新、映画祭の情報などの情報を発信している。

(8) 2018年活動のまとめと課題

現在の実働スタッフは18名。活動に参加している理由や各自の状況はそれぞれ違っている。音声ガイド台本は、台本担当者の書いた「たたき台」を元にディスカッション形式で作っているため、違った視点からの意見はとても貴重である。スタッフがそれぞれの状況に応じた頻度で参加し、自分の特性にあった目標を見つけ、実現できる活動の場となるようにしていきたい。携帯アプリUDcastの普及により、日本映画のメジャーな作品は、音声ガイドが映画館、家庭でも聴く事が出来る時代に突入した。しかしミニシアター系の多くの作品には音声ガイドが付いていない。外国映画は、以前として音声ガイド付で楽しめる作品が非常に限られている。バリアフリー制作チームとして活動を継続する為に必要なことは、特に朗読者の育成とスキルアップ、声優、演出者、録音編集など専門的な分野の人材の確保である。更に字幕を作りたいという新しいスタッフの要望にも応じられるように方法を探って行きたい

2. 劇団わが町

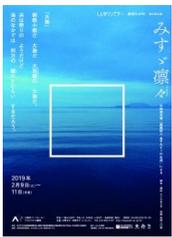
アートセンター創設時より、ふじたあさや中心に企画していた市民のための市民による新百合ヶ丘の市民劇団。

2012年6月に生まれた新しいゆるやかな劇団。劇団員は地域住民の方々を中心に構成されている。2017年からの第二期の2回目の公演となり、総勢44名で行われた。年齢制限はなく、現在11～78歳までのメンバーが所属。しんゆりシアターのラインナップの一翼を担い、長期的に様々な創造活動を行っている。

■しんゆりシアター 劇団わが町 第8回公演 「みすゞ凜々」

開催期間：2019年2月9日（土）～11日（月祝） 5回公演

会場：川崎市アートセンター アルテリオ小劇場



■公演チラシ

■出演者集合写真

2012年より始まった劇団わが町、川崎市アートセンター指定管理第二期の第2回公演であり、劇団通算第8回目の公演となる舞台は、矢崎節夫著「金子みすゞの生涯」を、ふじたあさやが脚色・演出した『みすゞ凜々』を上演した。

公演は劇団わが町が始まって以来初の、前売券全数完売となり、5回公演で計930名の動員となり、鑑賞した来場者からも大変好評な舞台となった。

当法人は本公演の企画・制作を担った。

[委託事業]

実施なし

[協賛事業]

「平成30年度あさお芸術のまちコンサート」に、名義等で協賛を実施した。

II 運営組織の状況に関する事項

1. 事務局運営

近年の年間の事務局の業務予定は、メインとなる映画祭事業が3月～12月（会議は1～2月もあり）長期に渡ってきており、10～2月に劇団わが町の稽古・公演、合間に委託事業等といったスケジュールで行ってきたが、今年度はわが町が9月～12月だったため、company maの公演主催が6月など、様々

な事業が重なることが多く、さらに 2018 年度はバリアフリーの助成金事業でワークショップの実施も 12～2 月に実施したため、業務が年末から春先にかけて滞る事態となった。特に日本芸術文化振興基金の申請・報告決算と映画祭の後処理・始動の時期が重なる時期に、事務局員 2 名のうち 1 名が 5 月まで本格稼働できないため、事務局業務処理が遅れたり手が回らない部分が多々生じた。映画祭終了後のボランティアスタッフの確保や、年間を通じての活動業務の配分を再検討する必要がある。

資金運営面でも法人事務局員の冬期の給与や、事務局の家賃を含む管理費は映画祭から捻出されているため、映画祭の収益が法人の運営に直接関わる状況は続いている。

映画祭の収入源増のために、寄付金、協賛広告の増加の努力を行い、エリアマネジメントコンソーシアムの協賛もあり・協賛広告を含めた協賛収入は前年度より 35 万円増となった。しかし、市や芸術文化振興基金からの助成の減少は引き続いているため、映画祭のボランティアスタッフから 2000 円（年間で）の参加費を徴収することはそのまま続行している（学生を除く）。

2. 事業展開

平成 30 年度は、映画祭事業の他の文化事業は、バリアフリー副音声日本語吹替え制作、劇団わが町企画・制作、company ma 公演の主催といった前年度とほぼ同内容の事業に加え、公益財団法人川崎市文化財団が行う「パラアート推進公募型事業委託」に採択された「高校生以上を対象にした映画副音声ガイド制作入門講座」を行った。

3. 役員

(1) 役員の名氏及び職制上の地位

地 位	氏 名	専 門
理 事 長	藤田 朝也	演劇・ミュージカル
専務理事	中山 周治	地域・教育・映画祭
理 事	黒田 隆	音楽
理 事	千葉 茂樹	映画・映画祭
理 事	森 正敏	演劇
理 事	安岡 卓治	映画・映画祭
理 事	瀧澤 春江	映画祭・バリアフリーシアター
理 事	岩倉 宏司	宣伝・広報
理 事	大谷 賢治郎	演劇
理 事	徳沢 純子	映画祭
監 事	白鳥 あかね	映画・映画祭
顧 問	佐藤 忠男	映画評論家
顧 問	中島 豪一	川崎新都心街づくり財団評議員
シニア・アドバイザー	下八川 共祐	昭和音楽大学理事長
シニア・アドバイザー	岩崎 敬	環境デザイナー

以上

決算報告書

(第 13 期)

自 平成30年 4月 1日

至 平成31年 3月31日

特定非営利活動法人 KAWASAKIアーツ

貸借対照表

平成31年 3月31日 現在

特定非営利活動法人 KAWASAKIアーツ

(単位： 円)

資 産 の 部		負 債 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
【流動資産】	4,604,850	【流動負債】	2,083,712
現金及び預金	3,952,847	短期借入金	2,002,172
未収入金	652,003	未払法人税等	70,000
		預り金	11,540
		負債の部合計	2,083,712
		純 資 産 の 部	
		【株主資本】	2,521,138
		利益剰余金	2,521,138
		その他利益剰余金	2,521,138
		非営利事業に係る繰越利益	5,939,826
		繰越利益剰余金	-3,418,688
		純資産の部合計	2,521,138
資産の部合計	4,604,850	負債及び純資産合計	4,604,850

損 益 計 算 書

自 平成30年 4月 1日
至 平成31年 3月31日

特定非営利活動法人 KAWASAKIアーツ

(単位： 円)

科 目	金 額	
【売上高】		
売 上 高	2,266,941	
広 告 売 上	1,375,300	
物 販 売 上	501,245	
バ リ ア フ リ ー 収 入	13,500	
売 上 高 合 計		4,156,986
【売上原価】		
当 期 商 品 仕 入 高	219,929	
映 画 仕 入	1,648,020	
合 計	1,867,949	
売 上 原 価		1,867,949
売 上 総 利 益 金 額		2,289,037
【販売費及び一般管理費】		
販 売 費 及 び 一 般 管 理 費 合 計		12,620,055
営 業 損 失 金 額		10,331,018
【営業外収益】		
受 取 利 息	35	
雑 収 入	87,020	
営 業 外 収 益 合 計		87,055
経 常 損 失 金 額		10,243,963
【特別利益】		
川 崎 市 負 担 金	6,186,000	
麻 生 区 推 進 委 託 金	924,200	
協 賛 金	400,000	
文 化 財 団 委 託 金	1,370,000	
日 本 芸 術 文 化 振 興 助 成 金	652,000	
寄 付 金	90,660	
特 別 利 益 合 計		9,622,860
税 引 前 当 期 純 損 失 金 額		621,103
法 人 税 ・ 住 民 税 及 び 事 業 税		70,000
当 期 純 損 失 金 額		691,103

販売費及び一般管理費内訳書

自 平成30年 4月 1日
至 平成31年 3月31日

特定非営利活動法人 KAWASAKIアーツ

(単位： 円)

科 目	金 額	
給 料 手 当	4,050,000	
雑 給	48,020	
福 利 厚 生 費	443,627	
広 告 宣 伝 費	144,316	
接 待 交 際 費	4,944	
会 議 費	10,210	
旅 費 交 通 費	485,595	
消 耗 品 費	5,145	
事 務 用 消 耗 品 費	200,110	
新 聞 図 書 費	130	
支 払 手 数 料	615,000	
地 代 家 賃	1,784,762	
賃 借 料	545,796	
リ ー ス 料	11,016	
保 険 料	92,755	
雑 費	261,558	
謝 礼	2,288,550	
機 材 費	308,691	
制 作 費	68,102	
ホ ー ム ペ ー ジ 関 連 費	33,491	
印 刷 費	1,218,237	
販売費及び一般管理費合計		12,620,055

株主資本等変動計算書

自 平成30年 4月 1日
至 平成31年 3月31日

特定非営利活動法人 KAWASAKIアーツ

(単位： 円)

【株主資本】

資 本 金	当期首残高		0
	当期末残高		0
利 益 剰 余 金			
そ の 他 利 益 剰 余 金			
非営利事業に係る繰越利益	当期首残高		5,939,826
	当期末残高		5,939,826
繰 越 利 益 剰 余 金	当期首残高		-2,727,585
	当期変動額	当期純利益金額	-691,103
	当期末残高		-3,418,688
利 益 剰 余 金 合 計	当期首残高		3,212,241
	当期変動額		-691,103
	当期末残高		2,521,138
株 主 資 本 合 計	当期首残高		3,212,241
	当期変動額		-691,103
	当期末残高		2,521,138
純 資 産 の 部 合 計	当期首残高		3,212,241
	当期変動額		-691,103
	当期末残高		2,521,138

注 記 表

特定非営利活動法人 KAWASAKIアーツ

この計算書類は、「中小企業の会計に関する基本要領」によって作成しています。

重要な会計方針に係る事項に関する注記

資産の評価基準及び評価方法

有価証券の評価基準及び評価方法
移動平均法を採用しています。

たな卸資産の評価基準及び評価方法
最終仕入原価法を採用しています

固定資産の減価償却の方法

有形固定資産
定率法または旧定率法を採用しております。

ただし、平成10年4月1日以後に取得した建物（附属設備を除く）については旧定額法、平成19年4月1日以後に取得した建物（附属設備を除く）については定額法、平成28年4月1日以後に取得した建物附属設備及び構築物については定額法を採用しています。

収益及び費用の計上基準

発生主義を採用しています

その他計算書類の作成のための基本となる重要な事項

金利の取得原価算入はしていません。

一株当たり情報に関する注記

一株当たり純資産額	0 円 00 銭
一株当たり当期純利益金額	0 円 00 銭